

Ⅱ.2006年投稿ブログ：事実を掴まないと、 まともな改善策は生まれない

01.海の川、あるいは黒瀬川で電気は起こせるのか

学生の頃、紀伊半島の南端串本から小さな連絡船で対岸の大島に渡り、潮岬に立ったことがある。「ここは串本向かいは大島」と民謡に歌われているところである。岬に立つと、突端の岩礁を黒潮が音を立てて西から東へ流れていた。

その昔、紀伊国屋文左衛門がミカンを積んで、この流れに乗って江戸まで突っ走ったかと思うと、いささかの感慨もあった。あるいはこの流れの先にある八丈島からの島抜けは、この流れのために事実上不可能だったという話なるほどと納得できた。江戸時代、この流れは黒瀬川と呼ばれて恐れられていたらしい。

英国のマリン・カレント・タービンという名前の会社が、北アイルランドで、潮流発電のプロトタイプを設置し、来年(06年)、地域の電力網に接続するとのことだ。

A prototype device

is to be installed
in Northern Ireland's Strangford Lough
and
connected to the local power grid
next year.

--December 28, 2005, The Guardian--以下同じ

The companies

say that
while
a number of power generation installations
use wave power or tidal rise and fall,
the Strangford Lough installation
will be
the first commercial prototype
to harness the energy of underwater tidal currents.

会社の言うところによれば；

幾つかの(これまで)設置された発電装置は
波の力や潮の満ち干を
利用しているのに対して、
このストラングフォード・ロッホの設置は
潮の流れのエネルギーを取り込んだ
初めての商用プロトタイプと
なるだろう。

製品名「SeaGen」というこの装置は、ツインタービン型で、800世帯の電力を賄えるとのことで、同社の重役の話では、このプロトがうまく行けば、5年以内に最初の商用発電会社が稼動を始めることを期待しているとのことである。

英国は、古くなった原子炉 (nuclear reactors) や、EUの排ガス規制 (emission regulation) に合わなくなっている古い火力発電を、廃止しなければならないので、その穴埋めに躍起になっているようだ。

イギリスは緯度として、日本と比べると随分北にあり、メキシコ湾流のおかげで何とか凍えずに済んでいる。その流れが、北極海の氷が溶けると、おかしくなる危険があるとのことで、もしそうなれば冬の暖房は大変な話になる。北海油田もピークを過ぎてしまったし、リニューアブル・エネルギーに大きな期待をかけるをえない。

その点、日本は相変わらず南洋の島民風のノーテンキであるから、来るべき冬の時代への備えは、今のところ限りなくゼロに近いのではないか。アーキテクチャーを描く人も居らず、いたとしてもそれを推進する人はもちろんどこにも居なく、新聞を読んでいても、テレビを見ていても、ウェブをサーフしていても、どこにもヤバイ事実は報道されていない。

このままでは、新聞によると勝っているはずの戦争なのに、ある日突然B-29の焼夷弾の雨に晒されたあの60年前と同じことが繰り返されるのではないかと、私は心配でならない。(06. 1. 11. 篠原泰正)



02.事実を知る、あるいは気象異変

本年(06年)1月30日、英国政府が地球温暖化(global warming)に関するレポートを発刊した。表題は「危険な気象変動を避ける」(Avoiding Dangerous Climate Change)。このレポートの序文で、英国のトニー・ブレア首相(Prime Minister Tony Blair)が書いている:

It is clear
from the work presented
that
the risks of climate change
may well be greater than we thought.

ようやく事態の深刻さに気がついたか、とか、その割には対策が遅れているではないか、と言いたいところだが、率直に述べているところは認めていい。

このレポートは1年前の2月に英国気象庁(UK Meteorological Office)主宰の会議で提出された科学者達の報告をまとめたものである。この中で、南極(Antarctic)とグリーンランド(Greenland)の氷床(ice sheets)が溶けはじめているのではないかと懸念され、もしそうなれば海洋の高さ(sea levels)は5メートル近く上昇することになると見積もられている。

懸念されているのは、以前にも書いたが、この異常気象はすでに回復不能地点を過ぎてしまったのではないか、というところだ。仮にそうだとしても、もはや手遅れだ、何をしても無駄だから、最後の日が来るまでドンチャン騒ぎで酔いつぶれていよう、というわけにはいかない。あらゆる対策を尽くすべきであろう。

事実をできるだけ正確に知ること。これが生き延びるための出発点である。事実を知るのが怖いから、事実を述べると叩かれるから、目をふさいでおこうという態度は、死を招くことになる。

このようなレポートは日本から出したかったが、そのようなことは、南洋の島国の天然ボケの集団には望むべきも無いところなのだろう。

(06. 2. 4. 篠原泰正)

03.メタンガス、あるいは本当にやばい

シベリアの永久凍土が溶け始めている話は、前にも書いたが、最新の調査では、その溶解度がとてつもなく早く進んでいるとのことだ。

The frozen bogs of Siberia

are melting,

and the thaw

could have devastating consequences for the planet,
scientists

have discovered.

(The Observer September 10, 2006 以下引用同じ)

シベリアの凍った沼沢地が

解けている、

そしてその凍解は

地球に壊滅的な結果を

もたらすかも知れない、

と科学者達が発見した。

They have found

that

Arctic permafrost,

which is starting to melt due to global warming,

is releasing five times more methane gas

than their calculations had predicted.

科学者たちは

以下を見つけだした；

北極圏の永久凍土は—それは地球高温化*によって溶け始めている—、

自分達の以前の計算で予測したよりも

5倍ものメタンガスを

放出している。

The level of emission

is alarming

because

methane itself

is a greenhouse gas.

その放出の程度は
危機的である、
なぜなら
メタンそれ自体が
温室効果ガスであるから。

この記事は先週発行された科学雑誌「Nature」掲載の論文に基づいて書かれている。この雑誌は WEB 上でも有料なので、私は直接読んでおらず(科学者でもないし)、英国の新聞オブザーバーの記事に基づいて書いている。

前にも書いたように、永久凍土がいったん溶け始めると、そこがより多くの太陽熱を吸収し、更に溶解が加速される。したがって、氷漬けにされていたメタンガスがますます多く排出され、地球高温化*が加速され、それがまた凍土の溶解を加速する。マイナスのスパイラルが始まっていることになる。

*「global warming」は、日本では「地球温暖化」と訳されているが、温暖という語感はプラスのイメージを与えるため、この言葉から危機感がなかなか伝わらない。そのため、私としては、高温化と表したい。

The discovery of these levels of methane release suggests that

これほどの割合でのメタンの放出という発見は以下のことを示唆している;
the planet

is rapidly approaching

a critical tipping point

地球は急速に致命的な頂点(臨界点)に近づいている

at which

その頂点において

global warming

could trigger

an irreversible acceleration in climate change.

地球高温化は気象異常を回帰不能にまで加速する引き金となるかもしれぬ。

そして分析は示唆している:

The world

has less than a decade

世界は10年以下しか持っていない

in which to halt global warming

地球温暖化を止めるための期間として

before it reaches a point of no return.

その地球温熱化が回帰不能地点に到達するまでに.

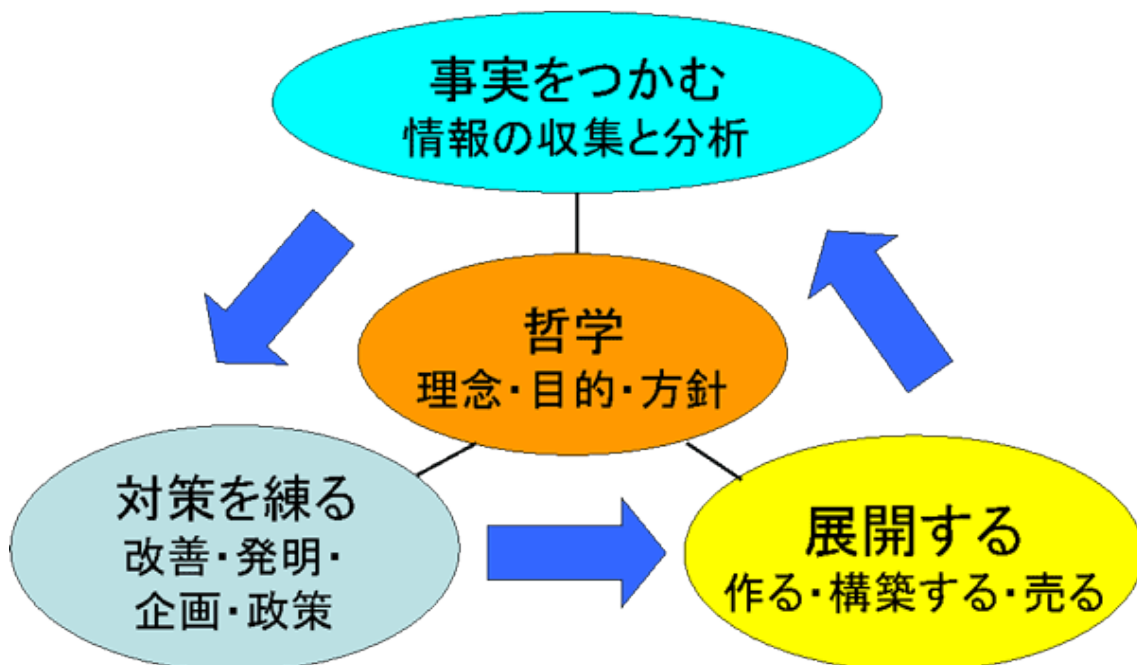
この永久凍土にはメタンだけでなく二酸化炭素(CO2)も含まれており、地球上の凍った地帯(frozen zone)には、なんと合わせて450billion tonnes(4500億トン)ものガスが閉じ込められているのだそうだ. そして、メタンは二酸化炭素よりも温熱化に23倍もの影響を与えるのだそうだ.

石油が地球上にまだ半分残されていようがなんだろうが、急速に石油消費の割合を減らさない限り、俺達は「死ぬ」ことになる. もうこのポイント・オブ・ノーリターンは回避できないのかも知れないが、最後の必死の努力をすべきであろう. つまり、もう手遅れかもしれないが、CO2 排気を劇的に減らす努力をするしかない.

そんなことができるわけがないと思われるが、何もしないで「暑熱」地獄にあえぐ日を迎えるというのも野暮な話だ. それともやはり、何もしないで、その日がくるまで酒喰らって楽しく暮らすか.

(06. 9. 11. 篠原泰正)

何事かを生み出す仕事とは



04.回帰不能、あるいは憧れの北極航路

一年間このブログを書いている間に、地球環境破壊は、当然のことながら、休みなく続いていたようで、最新のニュースを読んでいると、これはどうやら回帰不能地点を乗り越えてしまったか、という印象が強い。

アメリカのNASAの最新のレポートでは、この2年間の(04年と05年)夏季の北極海の海水の溶け方が尋常ではないことが報告されている。

Two separate studies by NASA,
using different satellite monitoring technologies,
both show a great surge
in the disappearance of Arctic ice cover
in the last two years.

Independent (UK), September 15, 06(以下引用同じ)

NASAによる二つの別々の研究

—異なる衛星モニタリング技術を用いた—

両方ともたいへんな進展を示している

北極圏の氷で覆われた地域の消滅において

この2年間での。

One,
from the Jet Propulsion Laboratory in California,
shows
that
Arctic perennial sea ice,
which normally survives the summer melt season
and remains year-round,
shrank by 14 per cent
in just 12 months between 2004 and 2005.

一つは

—カリフォルニアのジェット推進研究所の—

以下を示している:

北極圏の万年氷が

—通常は夏の溶解季にも(溶けずに)生き残り1年中凍ったままの—

14%も縮んでしまった

04年から05年の12ヶ月だけで。

1年間でトルコの面積ぐらいの氷がなくなってしまったという。

従来は、このままでは、2070年までに北極海の氷はなくなってしまうと予測されていたが、この調子で溶解が進めば、それよりも何十年も早くそうなる、ということだ。

私の生きている間に北極海航路で欧州まで旅することができるようになるかも知れぬ。

また北極熊 (polar bear) は、氷がなければ生きていけないから、絶滅してしまう。本物は上野動物園でしか見ることができなくなる。

もう一つの機関、Goddard Institute for Space Studies, in New York, の所長であり著名の気象学者である Jim Hansen 氏は、全世界の政府に対して、「planetary environmental catastrophe」を避けるためにラディカルなアクションを取るべきだと警告を発した。彼は言う：

**"I think
we have a very brief window of opportunity
to deal with climate change...
no longer than a decade, at the most"**

長くても10年しか、気象激変に対処する時間が残されていない。

タイタニックという名前の地球丸の船上で、くだらないことをグチャグチャやっている暇はないわけだ。もっとも本家のタイタニック事件とは異なり、今回は「冰山」は溶けてなくなっている。

万年氷が溶ければ海面が姿を現し、その分太陽熱が吸収されるから、ますます暑くなる。子供でも分かる理屈だから、溶解の速度はますます加速されるだろう。もちろん、海氷が溶けても海面が上昇するわけではない。酒飲み誰でも経験して分かっているように、グラスの中のウイスキー水割り氷が溶けても、あふれ出すことはない。水面は同じ高さに保たれている。しかし、これが、陸の上の氷 (land-based ice) となると、すなわち、カウンターにじかに置かれた氷が溶ければ、デスクの上は水浸しになる。

北極海の氷と同じようにガンガン溶解が進んでいるグリーンランド (Greenland)、南極大陸 (Antarctica) およびヒマラヤやアンデスや欧州アルプスの氷河 (mountain glacier) がこのままいけば、海面 (sea levels) が上昇する。

The West Antarctic Ice Sheet

would,
if it were to collapse,

raise sea levels around the world by 5 m.

西南極の氷床が溶けて崩壊すれば、世界の海面は5メートル上昇するだろう。

銀座のもっとも高い中央通の海拔は3メートルだから、哀れ水の中になってしまう。

かつて私が夜な夜な出沒したあの飲み屋この飲み屋も水の下になる。

長生きはするものではない。

(06. 9. 17. 篠原泰正)

1. 文章は一つの建造物である
したがって、文章は「構造図面」化できる

2. 一つの文章は3個のモジュールで構成されている
第1のモジュールはサブジェクトである
第2は動詞である
第3は、文章の記述種類によって以下の3種がある：
(1) S; サブジェクトの属性を説明する
(2) M; 動詞で示された状態を更に説明する
(3) O; オブジェクト



05. 旱魃、あるいは最大の厄災

秋雨前線が活発化して、強い雨が降っている日に、旱魃(かんばつ) (drought) の話はそぐわない気もするが、英国のインデペンデント紙 (Independent) が一昨日 (06年10月4日) 付けで伝えるところによれば、英国の「Met Office's Hardley Centre for Climate Prediction and Research」が、気象異変 (climate change) の結果旱魃が広がり、今世紀末までに地球上の土地の半分が、農業生産ができない砂漠になってしまっているだろうとの予測を発表した。

しかも、この予測はまだ甘くて、砂漠化の進行はもっと急激に進行するという意見も、科学者の間から出されているとのことだ。

We are talking

about 30 per cent of the world's land surface
(are) becoming essentially uninhabitable
in terms of agricultural production
in the space of a few decades.

世界の土地の30%が、農業生産という意味において人間が住めない地域に、これからの2, 30年の時間枠のなかで、なってしまうだろう。

この記事には書かれていないが、旱魃の脅威に晒されている地域として、オーストラリアと米国中西部も挙げられているから、「先進諸国」の中でも直接の影響を受ける国が出てくる。しかし、この30%の大半は、アフリカである。

アフリカとは本当についていない地域だと、遠く離れたところから私は「同情」だけしている。なお、「だけ」、と書いたのは、支援のために何一つしていないからである。ヨーロッパ諸国の植民地として荒らしまわれ、第二次大戦後、名目上の独立を果たしたが、旧宗主国が取っただけとって後は投げ出してしまったために、うまく離陸できなかった国が多い。そして、今回の気象異変騒ぎである。先進諸国の馬鹿騒ぎのおかげで出てきた気象異変の、最大の犠牲者がアフリカとなる。先進諸国から、二度、踏んだり蹴ったりされることになる。

作物が取れない砂漠になってしまえば、そこに暮らしてきた人々は、死ぬか、難民となって他の場所に移るしかない。ユーラシア大陸とアメリカ大陸はこれらの難民を受け入れられる余地を持っているのだろうか。

私もその中の一人としての「俺達」は、戦後60年、特にこの40年、とんでもないことをしてかしてきたのだ。もし、地球傷害の罪を裁くというものが国際法廷であれば

ば、俺達全員「過失地球傷害罪」で有罪はまちがいない。なお、今から以降、地球への傷害を続ける行為は、もう「過失」ではなく、「故意」となる。相手を傷つける結果になるであろうことを十分承知の上で犯行に及んだ、と裁定されることになる。

(06. 10. 06. 篠原泰正)

表現方法の違いを知るだけでも上達する

根岸の里の侘び住まい: 表現方法の違い

日本語 叙情型
周りの状況から述べる

英語 論理型
先に基本事項・説明は後から

春雨や	S	私は
根岸の里の	V	住んでいます

(主語は裏に隠れている)	how	侘しく
侘び住まい	where	根岸の里で
	when	春雨の頃

英文の構造に馴れる

1. 大まかに 述べてから 詳しく説明
2. 抽象的に 述べてから 具体的説明
3. 結論を 述べてから 理由/背景を説明
4. 主唱を してから 理由/背景を説明
5. 事実を 述べてから 状況/理由を説明

06.地球破壊、あるいは俺達はやっちゃった

40年前に、オゾン層を破壊する化学物質が大気中に積み上がっている (ozon-destroying chemicals were piling up in the atmosphere)、と警告を発した英国の科学者ジェームス・ラブロック (James Lovelock) 教授が、ワシントン・ポスト紙のインタビューで語っている話 (9月2日付、06年) は、まさに身の毛のよだつような恐怖の物語である。

オゾン層破壊に関しては、当時彼の警告を受けて各国政府が対応を図ったので、なんとかそれ以上悪くはならずに来ている。しかし、その他の彼の警告はほとんど無視され、あるいは私のように無知なまま、ドンチャン騒ぎを続けてきて、今日に至っている。

そして、彼の言うところによれば；

Our global furnace

is out of control.

By 2020, 2025,

you *will be able*

to sail a sailboat to the North Pole.

The Amazon

will become

a desert,

and the forest of Siberia

will burn

and release

more methane

and plagues

will return.

地球の溶鉱炉は制御不能になってしまっている。2020年か25年までには北極点までヨット (帆船) で行けるようになるだろう。アマゾン は砂漠になりシベリアの森林は燃えてしまいもっと多くのメタンガスを放出し、疫病 (ペスト) が再び襲ってくるだろう。

"It is too late to turn back."

「元に戻るにはもう遅すぎる。」

他の報道によれば、この1年でイタリアの面積ぐらいの森がシベリアで燃えてしまったというから、教授の言うことを笑ってられない。北極海の氷が溶けはじめ、グリーンランドの氷が溶け始めているわけだから、その溶けた面積だけ太陽熱を多く吸収するわけだから、溶け方が加速することは素人でも理解できる。暴走は始まっている。

ラブロック教授が最近出した本「**The Revenge of Gaia: Earth's Climate Crisis and the Fate of Humanity**」(ガイアの復讐:地球の気象危機と人類の運命)は、読むのが怖いけれど、やはり読まざるをえない。「Gaia」とは教授が命名した地球の別名である。**He came to see Earth as a self-regulating biosphere.** 地球は自分で自分を制御している生物球体と、彼はみなすようになった。例えば炭酸ガスが増えだすと森林を広げて吸収するようにしたとか。その地球のセルフ・レギュレーションを俺達人類、特に「先進諸国」の人間が、たかだかこの50年の時間内で壊してしまったことになる。

私も含めてたいいていのは、嫌な事実を正面から見ることを怖がり、なるべく知らないようにする。そして、どうしても見ざるをえなくなって対策を考えるようになって、結論はできるだけ後回しにして出さないようにする。そして、こうするしかないと分っても、それを実行に移すのは一日延ばしにする。このままの進路で進めば乗っているタイタニックが冰山にぶつかるかわかっていても、日常の事ごとに忙しく立ち働くことでまぎらわしてしまおうとする。あるいは、船上の賑やかなダンスパーティで美女を物色し、それもままならなければ酒をくらって酔っ払う道を選ぶ。

それが、私であり、あなたである。しかし、われわれには子供がおり、孫のいる友人も多い。次世代、次々世代に大変なツケを渡すことになる。どうすればいいのか。アラスカが温暖な気候帯になるから、グリーンランドの氷がなくなり、その名の通りグリーンになるから、今のうちから土地を買っておき、いつでも移住できるようにするか。そのような「ジコチュー」の方策しか取れないのだろうか。

ともかく、事実を知り、なんとか対策を考え、その対策を「文書」に記述する努力だけは続けなければならない。せめてもの償いのためにも。

(06. 10. 11. 篠原泰正)

07.氷河、あるいは水、水、水

私は本物の氷河 (glaciers) を一度も見たことがない。見ないうちにこの地球上から氷河が溶けて消えてしまう公算が大きい。地球高温化によって、東京がトロピカルになっても、暑い暑いと騒ぐだけで命に別状はないだろうけれど、まっ先駆けて高温化の犠牲になりそうなのは、天然の貯水槽である氷河から、夏季に水を供給してもらっている二大地域、すなわちヒマラヤ (Himalayas) の氷河を水源とする5本の大河の流域の人々 (中国、インド、パキスタン、バングラデシュなど) と、アンデスの氷河の水で生きているペルー、ボリビア、コロンビア、チリ、他の南米の人々である。

Andean glaciers

are melting so fast

that

some are expected to disappear within 15-25 years.

Snow and ice cover in the eastern Himalayas

has shrunk by about 30% since the 1970s.

Of 150 glaciers

that once stood in Glacier National Park in the northern

US,

only 27

remains.

The US Environmental Protection Agency

says the biggest are a third the size they were in 1850.

Continued warming

could melt them completely by 2030.

冬場の降雨降雪が氷河地帯で蓄積されずにそのまま河に流れていけば、夏場に流れる水はなくなってしまう。作物ができなくなるから人々は逃げ出すしかない。

地下から水を汲み上げて畑に撒けばよい？ 残念ながら、この手はこの2, 30年のグリーン革命 (食糧の大増産) で行ってきたところで、おかげで、石油より先に地下の水の貯蔵が無くなりそうである。しかも地下水位が下がると「塩」が地上に上がってくるのだそうだ。塩が吹いた土地では何も実らない。まさに踏んだり蹴ったりである。

食糧危機が刻々と迫ってきているようだ。

(06. 10. 12. 篠原泰正)

08.マグロ、あるいは刺身よ、さようなら

日本名は覚えていないが英語で「southern bluefin tuna」(青背びれマグロ?)と呼ばれている高級マグロの日本全体での水揚げが、来年から半分に減らされるとのことだ。国際協定で約束した以上に捕獲してきたことがばれて、制裁を兼ねて減らされたい。正確に言えば、国際会議で減らすことに合意させられた。

Japan

has agreed

**to nearly halve its annual catch of southern bluefin tuna
after admitting
that
years of overfishing
had left stocks at dangerously low levels.**

Guardian October 17, 06

*海で生存している食糧用魚を英語では「ストック＝在庫」とみなすと言うことを始めて知った。かわいそうにマグロも彼らからみれば、人間に奉仕する単なるストックというわけだ。ここらあたりが私としては、どうにも付き合いかねる感覚である。

なぜ約束以上の量を捕獲しているのがばれたのか、オーストラリアの調査マンが、日本で販売されたマグロ刺身の量が捕獲協定より多い事を探り出したらしい。大変な努力だ。

The overfishing

was uncovered

when

Australian investigators

found

**the amount of tuna sashimi
being sold in Japanese market
was more than double its agree quota.**

(引用一同上)

魚は再生可能なありがたい天然資源であるが、捕りすぎると再生しなくなる。そのようなことは誰でもわかっているが、今、この時点でのお金儲けのために、捕りまくってしまうのが人間の悲しいところである。

マグロは従来欧米社会ではそれほど重視されてこなかったが、近年の健康食ブームと「狂牛病怖い」のおかげで、刺身、すし、などの魚料理に注目があつまり、品不足になってきている。自分達に関係するとなると、ギャーと大声で騒ぐのがアングロ流だから、マグロも槍玉に挙げられたわけだ。「サシミ」、「スシ」を世界に広めたおかげである。

捕りすぎてマグロが世界の海から消えてしまったら、それこそすし屋に行っても卵焼きばかり食う破目になるだろう。ひ孫の代にはマグロを食べたことがない日本人が出てくることになる。その前に、捕獲数がへれば当然価格が上がるから、市場には出回っても、われわれの口には届かないことになる。

石油や天然ガスや真水だけでなく、小麦粉、とうもろこしだけでなく、魚も世界で取り合いになるわけだ。魚を食べ続けるには、瀬戸内海の口、紀伊水道、豊後水道、関門海峡に巨大な網をかけて、内海全部を養魚場にするのが、残された唯一の方策ではなからうか。

(06. 10. 23. 篠原泰正)

文化としての日本語、文明としての日本語を考えると良い

